

情動性知能に関する研究の動向

小松, 佐穂子
九州大学大学院人間環境学研究院

箱田, 裕司
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/20073>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 12, pp.25-32, 2011-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

情動性知能に関する研究の動向

小松佐穂子¹ 九州大学大学院人間環境学研究院
箱田 裕司 九州大学大学院人間環境学研究院

The review of the study on emotional intelligence

Sahoko Komatsu (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Yuji Hakoda (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

We reviewed the study on emotional intelligence (EI) and the relationship between EI and coping. EI is the intelligence to perceive, recognize and control one's own and other's emotions. There are two types of EI measurements: performance-based tests and self-reported questionnaires. This review showed that: (a) Self-reported EI showed a consistent pattern of relations with coping styles, whereas performance-based EI demonstrated low or no correlation with coping styles, (b) Self-reported EI was correlated with adaptive coping positively and with maladaptive coping negatively, and (c) self-reported EI might be confounded with personality. The above-mentioned studies were of adults. Therefore we argued that future studies on EI should examine the EI of children.

Key Words: emotional intelligence, performance test, self-report, coping

はじめに

人は、集団の中で暮らしている。集団の中で生きていくためには、対人コミュニケーションが必要であり、自分の気持ちや相手の気持ちを正確にとらえ、またその場の状況に応じて行動をしなければならない。本稿は、そのために重要な“情動性知能”という新しい概念について取りあげ、さらに、この新しい概念の応用的側面として、これまでに多くの研究で検討されてきているコーピングとの関係について検討している研究をまとめ、“情動性知能”の重要性を論じる。

情動性知能の概念と測定法

情動性知能とは何か

一般的に個人の能力を表す“知能 (intelligence)”という概念があるが、知能に関する心理学的研究は古くから行われている。また、知能を測定する検査も確立されており、ビネー式知能検査 (Binet & Simon, 1905) やウェクスラー式知能検査 (例えば, Wechsler, 1955) が有名である。IQ (intelligence quotient) いわゆる知能指数は、このような知能検査から算出される個人の能力の指標であり、IQの高低によって、学業成績やその後の社会的地位などが影響を受け、人生における成功が左右されると考えられてきた。

しかし、近年、この“知能”に対して、より人生の成

功度に関わっていると考えられる概念が注目を集めている。それが“情動性知能 (EI: emotional intelligence)”である。日本では、情動性知能の高低を表す指標である“EQ (emotional quotient)”や“心の知能指数”という言葉の方がなじみがあるだろう。

情動性知能とは簡単に述べると、自分自身や他者の情動を認識したり、表出したり、また理解したり、コントロールしたりする知能、能力であり、主に対人コミュニケーションの場面で働く。“情動性知能 (emotional intelligence)”という言葉は、Salovey & Mayer (1990) によって初めて用いられ、モデル化された。その後、1995年にダニエル・ゴールマン (Goleman, 1995) が出版したベストセラー“Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ”がきっかけで、一般社会の人々の知るところとなった。そして現在までに、情動性知能に関する多くの科学的研究が行われている。

情動性知能は、あらゆる現場に取り入れられている。例えば職場環境では、チームワークやコミュニケーションスキル、リーダーシップなどとの関連が注目されている。また教育現場では、子どもの情動性知能が、学校内での友達同士や教師と生徒の関係へ影響していると考えられ、学業成績やさらには非行行動などにも影響していると考えられている (Zins, Payton, Weissberg, & O'Brien, 2007)。

このようにさまざまな応用場面において、情動性知能の重要性が注目されているが、科学的研究の分野では、さまざまな問題が生まれている (Matthews, Zeidner, & Roberts, 2002)。まずそのひとつが、情動性知能の“概念”および“モデル”に関する問題である。

¹ 本論文の査読に際して、貴重なコメントを下さいました査読者の先生方に深く感謝いたします。

情動性知能の概念とモデル

これまでに発表されている情動性知能に関するモデルには、大きく分けると2つのモデルがある。

まずひとつが、能力モデル (ability model) と呼ばれるモデルであり、情動性知能を“認知能力”としてとらえ、客観的な行動に基づいたものであるとする考え方である。したがって、能力モデルでは、個人の情動性知能を測定するために、知能検査のような客観的なテストを用いて測定する。この点もこの能力モデルの大きな特徴である。

能力モデルの代表的なものとしては、4 ブランチモデルがある (Mayer & Salovey, 1997)。このモデルでは、情動性知能を (a) 情動の知覚、表出、(b) 情動による

思考の促進、(c) 情動の理解、(d) 情動の制御という4つのブランチ (因子) からなるとしている (Table 1)。

もうひとつは、混合モデル (mixed trait-ability model) と呼ばれるモデルである。情動性知能を能力だけでなく、パーソナリティや気質など非認知的的特性を含んだ複合的な概念としている。このモデルの代表的なものには、バーオンのモデル (Bar-On, 1997, 2000) がある (Table 2)。これは、情動性知能の中には情動的、社会的なスキルだけでなく、楽観性や幸福感などの特性を含んでいると考えるモデルである。このモデルに基づいた情動性知能の測定方法には、主に質問紙を用いて主観的に評価をするという方法が用いられているが、バーオンのモデルでは、それに加えて、面接や複数の評価者によって評価すると

Table 1
4 ブランチモデル

情動性知能の4つのブランチ	各ブランチの内容
ブランチ : 情動の知覚, 表出 (Perception Appraisal and Expression of Emotion)	自己や他者の情動を認識したり, 自己の感情を表出したりする能力
ブランチ : 情動による思考の促進 (Emotional Facilitation of Thinking)	思考, 判断などを促進するために, 情動を利用する能力
ブランチ : 情動の理解, 分析 (Understanding and Analyzing Emotions; Employing Emotional Knowledge)	複雑な情動を理解したり, 情動の変化を分析するなど, 情動について深く理解する能力
ブランチ : 情動の制御 (Reflective Regulation of Emotions to Promote Emotional and Intellectual Growth)	ある特定の情動状態を維持したりするなど, 自己や他者の情動をコントロールする能力

Table 2
バーオン (1997, 2000) のモデル

情動性知能因子	下位因子	
個人内スキル (Intrapersonal Skills)	自尊心	(Self-Regard)
	情動の自覚	(Emotional Self-Awareness)
	アサーティブネス	(Assertiveness)
	自己実現	(Self-Actualization)
	自律心	(Independence)
対人スキル (Interpersonal Skills)	他者への共感性	(Empathy)
	社会的責任	(Social Responsibility)
	対人関係	(Interpersonal Relationship)
適応性 (Adaptability Skills)	問題解決	(Problem-Solving)
	現実性のテスト	(Reality-Testing)
	柔軟性	(Flexibility)
ストレスマネジメント (Stress Management)	ストレス耐性	(Stress Tolerance)
	衝動のコントロール	(Impulse Control)
気分 (General Mood)	幸福感	(Happiness)
	楽観性	(Optimism)

いう方法もとられている (Bar-On & Handley, 2003a, 2003b)。

これら 2つのモデル以外に、情動性知能には“特性的情動性知能 (trait EI)”という考え方がある (例えば, Petrides & Furnham, 2000)。これは、認知的能力からパーソナリティ、特性にまでわたる、非常に広い領域を含む概念であった情動性知能を、情動に関わる気質、特性に限定するものである。Petrides (2001) によれば、Table 3 のような 15 の因子が存在する。Petrides & Furnham (2000) は、Mayer & Salovey (1997) の能力モデルで述べられているような情動性知能を“能力的情動性知能 (ability EI)”とし、これとは別に、“特性的情動性知能”という概念が存在していると考え、2つの概念を明確に区別した (Table 4)。これらの2つの概念を区別するための一つの観点が、情動性知能の測定方法である。能力的情動性知能が客観的な行動を測定する能力テストを測定方法に用いる一方で、特性的情動性知能は、質問紙に

Table 3
特性的情動性知能の 15 因子

因	子
適応力	(Adaptability)
アサーティブネス	(Assertiveness)
情動の知覚 (自己と他者)	(Emotion perception (self and others))
情動の表出	(Emotion expression)
情動の操作 (他者)	(Emotion management (others))
情動の制御	(Emotion regulation)
衝動性の低さ	(Impulsiveness (low))
対人関係スキル	(Relationships)
自尊感情	(Self-esteem)
自己動機づけ	(Self-motivation)
社会的気づき	(Social awareness)
ストレスマネージメント	(Stress management)
共感特性	(Trait empathy)
幸福特性	(Trait happiness)
楽観的特性	(Trait optimism)

Table 4
特性的情動性知能と能力的情動性知能の違い

	特性的情動性知能 (trait EI)	能力的情動性知能 (ability EI)
測定方法	自己評価 (質問紙)	行動の評価 (客観的テスト)
概念の種類	パーソナリティ特性	認知的能力
測定テスト例	TEIQue (Petrides, 2001)	MSCEIT (Mayer et al., 2002)

Petrides Furnham, & Mavroveli (2007) より改変

よる主観的 (自己) 評価によって測定されるとしている。これら 2つの評価方法については、この後で述べる。

情動性知能の測定方法

以上のように、情動性知能には複数のモデル、概念があるが、その背景には情動性知能の測定方法の問題が関わっている。前項で明らかなように、情動性知能の測定方法は大きく分けると、客観的テストと主観的な自己評価 (質問紙) の 2つに分けられる。前者は、IQ を算出するための知能検査のように、客観的な行動を指標とした能力テストを用い、個人の認知的能力を測定する方法である。それに対して後者は質問紙を用い、情動性知能の自己評価を通して測定する方法である (Table 5)。

客観的テストによる測定 まず、客観的テストとしては、4 ブランチモデルに基づいた MEIS (Multi-factor Emotional Intelligence Scale: Mayer, Caruso, & Salovey, 1999) と、それに改良を加え、現在、情動性知能の客観的テストとして最も用いられている MSCEIT (Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test: Mayer, Salovey, & Caruso, 2002) が作成されている。テストの内容について具体例をあげると、例えばブランチの“情動の知覚”を測定するテストとしては、表情写真を提示し、その表情から情動がどれほど感じられるかを回答する方法がとられている。また、ブランチの“情動の制御”のテストでは、テスト文として“友人から仕事に採用されたと告げられたとき、以下に挙げる行為がどの程度有効か”が提示され、“祝福する”や“飲みに誘う”などの各行為についてその有効性を評定させることで、他者の情動をどう制御するかが問われている。

しかしこのような客観的テストには、以下のような問題点がある。それは、一般的な知能検査では、明らかな正解と不正解が存在するが、情動性知能のテストではこのような基準を作ることが難しいという点である。例えば、上記の表情知覚テストでは、知覚される表情が人によってさまざまに異なる可能性がある。そこで、このような得点化の問題を解決するために、MSCEITでは“コンセンサス得点 (consensus score)”と“専門家得点 (expert score)”が取り入れられている。コンセンサス得点とは、一般的な母集団の回答に基づいて得点化されるものであり、母集団の回答と一致しているかどうかで得点化される。一方の専門家得点は、心理学者や精神科医などの情動に関係の深い特定分野の専門家の回答に基づいて得点化する方法である。このように得点化を工夫することで、問題点を解決しようとしているが、これらの方法の妥当性についてはまだ、議論の途中である (Zeidner, Matthews, & Roberts, 2009)。

質問紙による測定 客観的テストに比べて、情動性知能を測定する質問紙は多く開発されている。ここでは主

Table 5
 主な情動性知能の尺度 (客観的テストと質問紙)

測定尺度名	出典	測定される因子数	備考
【客観的テスト】			
MEIS	Mayer et al. (1999)	4 因子	MSCEIT の前身
MSCEIT	Mayer et al. (2002)	4 因子	能力モデルに基づく
【質問紙】			
EQ-i	Bar-On (1997)	5 因子	混合モデルに基づく
TMMS	Salovey et al. (1995)	3 因子	特性的メタムードを測定
SSEIT	Schutte et al. (1998)	1 因子	Salvey & Mayer (1990) のモデルに基づく
TEIQue	Petrides (2001)	15 因子	特性的情動性知能を測定

な4つの質問紙について取りあげる。

まず、情動性知能を測定する質問紙としてよく用いられるのが、TMMS (Trait Meta-Mood Scale) である (Salovey, Mayer, Goldman, Turvey, & Palfai, 1995)。TMMS はもともと、自分の気分 (mood) に対して注意を向けたり、区別したり、制御したりする際の個人特性を“特性的メタ・ムード (trait meta-mood)”とし、それを測るための尺度として開発された。しかし、この尺度で測定したものが情動性知能の概念に類似することから、TMMS は情動性知能を測定する質問紙としても用いられるようになった。TMMS は30項目からなり、自分の情動にどれだけ注意を向けているかを測定する“情動への注意 (attention to feelings)”，自分の情動をどれだけ明確に認識しているかを測定する“情動の明瞭性 (clarity of feelings)”，混乱などをしても情動を安定させることができるかを測定する“情動の回復 (mood repair)”の3因子を測定している。

次に、混合モデルであるバーオンのモデルの論拠として用いられた質問紙が、EQ-i (Emotional Quotient Inventory) である (Bar-On, 1997)。EQ-i は、情動的かつ社会的な場面において働く知性について測定しており、情動性知能を測定する質問紙の中では、最も広い領域を網羅している質問紙である。全部で133項目から構成されており、17歳以上から適用可能である。測定される情動性知能の因子は、バーオンのモデルのとおり、複数の下位因子からなる5因子によって構成されている (Table 2 参照)。質問紙の回答は数値化され、知能検査のIQのように、平均値が100、標準偏差が15となるEQ値が算出される。

一方、Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim (1998) は、能力モデルである Mayer & Salovey (1997) の4ブランチモデルの前身であり、初めて情動性知能をモデル化した、Salovey & Mayer (1990) のモデルをもとにして質問紙を作成した。Salovey & Mayer (1990) のモデルは、情動性知能を能力に限定した Mayer & Salovey (1997) のモデルに対し

て、能力以外の側面も含んでいる。Salovey & Mayer (1990) では、情動性知能の因子として“情動の知覚と表出 (appraisal and expression of emotion)”“情動の制御 (regulation of emotion)”“情動の利用 (utilization of emotion)”の3つを想定しており、Schutte et al. (1998) は、まずこれらに対応する質問項目62項目を作成して調査を行った。因子分析を行った結果、1つの情動性知能因子が抽出された。最終的にこの因子に高い負荷量を持つ33項目を選び出し質問紙を構成している。この質問紙の名前は、SSEIT (Schutte Self Report Emotional Intelligence Test) やSSRI (Schutte Self-Report Inventory) など、この質問紙を使用した研究論文によってさまざまに表記されているが、ここでは統一して“SSEIT”を用いることとする。

最後に、特性的情動性知能を測定する質問紙としては、TEIQue (Trait Emotional Intelligence Questionnaire) がある (Petrides, 2001)。144項目で構成されており、Table 3 にあげられている15の因子が測定される。この“特性的情動性知能”という概念が生まれる背景となったのが、質問紙と客観的テストという2つの測定法の違いである。多くの先行研究において、質問紙 (EQ-i, TMMS, SSEIT) と客観的テスト (MSCEIT) でそれぞれ測定された情動性知能は、相関が低いかあるいは無相関であることが明らかになっている (Bastian, Burns, & Nettelbeck, 2005; Goldenberg, Matheson, & Mantler, 2006; Lopes, Salovey, & Straus, 2003; O'Connor & Little, 2003; Warwick & Nettelbeck, 2004)。これらの結果は、特性的情動性知能と能力的情動性知能は異なる概念である可能性を示唆するものである。

質問紙による測定において、よくとりあげられる問題点は、パーソナリティ概念との交絡の問題であり、質問紙で測定される情動性知能は既存のパーソナリティ概念と区別できるのかという点である。質問紙によって測定される情動性知能は、ビッグファイブ (外向性 (extraversion) や協調性 (agreeableness) など) のパーソナリティ概念との相関が高いことが明らかになっている

(例えば, Saklofske, Austin, Galloway, & Davidson, 2007)。この点に関しては、この後の情動性知能とストレスコーピングの関係について検討している研究のレビューにおいても論じる。

以上のように、情動性知能には、大きく分けて能力モデルと混合モデルという2つのモデルが提案されている。このように、情動性知能そのものの捉え方の異なるモデルが提案された背景には、やはり情動性知能の測定方法に客観的テストと質問紙という2つの方法が用いられていることによる部分が大きいと考えられる。IQで表現される一般的知能の測定には、主として客観的テストが用いられているが、情動性知能では、客観的テストによる測定法は質問紙ほど開発されていない。その原因は、テストを一般化できるほど、情動性知能の研究が進んでいないことのほかに、先述のとおり、一般的な知能に比べて、情動性知能を測定するテスト問題に明確な正答や誤答を設けることが難しいという、情動性知能特有の問題があることが考えられる。一方、質問紙では、複数開発されている質問紙の間で、互いに類似した情動性知能の下位因子が明らかになっているものの、全く異なる因子も含まれているため、一つの質問紙に統一されるまでに至っていない。これには、質問紙を開発した研究者の情動性知能概念の相違が考えられ、既存の現象に対してどこまでの情動性知能を適用するのかという見解が一致していないことが主な原因であると考えられる。今後の情動性知能の研究にはまず、概念の整理が必要であり、これまでに明らかになっている情動性知能の因子間の一致、不一致を明らかにしていく必要があると考えられる。

情動性知能とコーピングの関連

コーピングとは

コーピングとは、外部環境や自分の内部に生じた要求によって引き起こされたストレス反応を低減することを目的とした認知的、行動的努力のプロセスのことである。一般的なコーピングの種類として、以下の3つのコーピングがある (Endler & Parker, 1990; Lazarus & Folkman, 1984)。

1. 問題焦点型コーピング (Problem-focused coping) : ストレッサーを除去したり回避したりすることで、問題を解決しようとする対処法
2. 情動焦点型コーピング (Emotion-focused coping) : ネガティブな情動をコントロールしたり、低減したり、除去しようとする対処法
3. 回避型コーピング (Avoidance coping) : 気晴らしをしたりするなど、ストレッサーを回避しようとする対処法

上記の分類はコーピングの型に基づいて分類されたも

のだが、コーピングには、ストレスの衝撃を和らげるような良い結果を生みだしたり、状況の解決が失敗して問題を悪化させるような悪い結果を招いたりするものがある。したがって、用いたコーピングがストレスから個人を守るような適応的なものかという観点から分類される場合には、適応的コーピング (adaptive coping) と非適応的コーピング (maladaptive coping) という分類が用いられている (Roger, Jarvis, & Najarian, 1993)。

コーピングとの関連に関する研究

情動を知覚したり表出したりコントロールしたりする情動性知能という概念が生まれてから、コーピングとの関連が指摘されるようになってきた (例えば, Campbell & Ntobedzi, 2007)。なぜならば情動性知能に、情動をコントロールするなどコーピングが持っている性質と類似する部分があったためである。ここでは、新しい概念である情動性知能が、これまでに多くの研究で検討されてきているコーピングにどのように関係しているかについて述べることで、情動性知能の応用的側面について述べたい。

情動性知能とコーピングの関連について検討している研究は、分析方法として相関分析を用いている研究が多い。またこれらの研究では、情動性知能の測定法として、客観的テストを用いた場合と質問紙を用いた場合のそれぞれについて、コーピングとの関係を検討している。

客観的テストと質問紙 客観的テストと質問紙を用いた場合のそれぞれについて、コーピングとの関係を検討した研究に Goldenberg et al. (2006) がある。18歳から83歳の223名を対象に調査を行った。情動性知能の質問紙には SSEIT を用い、客観的テストには MSCEIT を用いた。測定されたコーピングは、問題焦点型コーピング、社会的サポート希求/情動表出のコーピング、自己抑制のコーピングの3つであった。相関分析の結果、質問紙との相関は、いずれのコーピングとも有意な正の相関 (最大で 0.54) が見られ、抑うつ傾向を統制変数として用いても相関係数は有意なままであり、最大で 0.43 の偏相関係数が得られた。しかし、客観的テストを用いた場合はほとんど無相関であった。有意な偏相関は最大でも -0.22 であり、自己抑制のコーピングと“情動の理解”因子で見られた。このことから、質問紙を用いた場合は、コーピングと有意な相関関係が見られるが、客観的テストを用いると相関が低いか、または無相関であることが明らかになった。

同様の結果は、Bastian et al. (2005) においても見られている。Bastian et al. (2005) は、質問紙として SSEIT のほかに TMMS を用い、客観的テストには MSCEIT を用いた。またコーピングについては、型による区別をせずコーピング尺度の合計点を用いた。相関分

析の結果、SSEITで測定される情動性知能との相関は0.36であり、TMMSでは、情動の明朗性と情動の回復の2因子との相関が、いずれも有意な正の相関であった。しかし、MSCEITとの有意な相関は見られなかった。

パーソナリティの交絡 以上の結果から、Goldenberg et al. (2006)と同じように、質問紙で測定した場合にのみ有意な相関が見られることが明らかになった。しかし、Bastian et al. (2005)ではさらに、有意な相関について、コーピングの説明変数として情動性知能以外に、情動性知能と交絡している可能性があるパーソナリティ因子と、一般的な知能に関わる認知能力（非言語的知能テストと言語的知能テストで測定）の影響について検討している。これにより、情動性知能がパーソナリティと認知能力以上に、コーピングを説明できるかを検討したのである。階層的重回帰分析の結果、パーソナリティと認知能力を統制した後の説明力は、6%と低いものであった。

一方で、質問紙として特性的情動性知能を測定するものを用いて、コーピングとの関係、およびパーソナリティとの交絡について検討している研究がある。Petrides, Pita, & Kokkinaki (2007)は、成人を対象に、TEIQueを用いて特性的情動性知能を測定した。コーピングについては、適応的なコーピングとして“合理的コーピング (rational coping: 状況を変えるために、行動を起こす, など)”と“客観コーピング (detached coping: 個人的に関わらない, など)”の2つを、また非適応的なコーピングとして“情動的コーピング (emotional coping: 取るに足らない, くだらないことと思う, など)”と“回避コーピング (avoidant coping: 時間が解決すると思う, など)”2つを測定した (Roger et al., 1993)。相関分析の結果、情動性知能とコーピングの間には有意な相関が見られ、適応的コーピングとはいずれも0.4以上の正の相関が見られ (特に合理的コーピングとは0.64)、非適応的コーピングでは、情動的コーピングと-0.58の負の相関が見られた。さらに、パーソナリティ因子と情動性知能を説明変数として重回帰分析を行っても、情動性知能と適応的および非適応的コーピングとの正負の相関関係は保たれたままであった。この結果は、Bastian et al. (2005)とは異なり、パーソナリティ因子とは別個に情動性知能とコーピングの関係が保たれていることを示す。その理由として一つは、Petrides et al. (2007)では特性的情動性知能を用いたことが考えられ、もう一つは、適応的コーピングと非適応的コーピングを区別して検討したことが考えられる。

コーピングの適応性と情動性知能 Petrides et al. (2007)では、コーピングの適応性と情動性知能の間に一定の関係を見出した結果となった。適応的なコーピングは、情動性知能と正の相関関係にあり、非適応的なコー

ピングとは負の相関関係を持つという点である。これは、以下の研究においても見られている。Saklofske et al. (2007)では、大学生を対象に、SSEITを用いて情動性知能を測定し、Petrides et al. (2007)と同じコーピング質問紙 (Roger et al., 1993)を用いて、適応的なコーピングと非適応的なコーピングを測定した。相関分析の結果、Petrides et al. (2007)と同じように、合理的コーピング (= 適応的コーピング) とは0.38の正の相関、情動的コーピング (= 非適応的コーピング) とは-0.26の負の相関が見られた。これらの結果から、コーピングの適応性と情動性知能との間には一定の関係が存在することが明らかになった。したがってこれらの関係性は頑健なものであると考えられる。

以上の結果をまとめると、客観的テストで測定された情動性知能とコーピングの相関は低いか、あるいは無相関であること、また、質問紙で測定された情動性知能との相関に関しては、パーソナリティとの交絡の可能性があること、しかし、コーピングを適応性によって分類して検討すると、情動性知能は適応的コーピングとは正の相関が見られ、非適応的コーピングとは負の相関が見られるという、一定の関係性の存在が明らかになった。

このように情動性知能は、これまですでに多くの研究で検討されてきたコーピングと関連していることが明らかになった。このことは、情動性知能という新しい概念について検討することにより、既存の研究成果の新たな側面が見出される可能性を示している。コーピングだけでなく、本稿の始めの方で述べたとおり、情動性知能は、職場での対人関係やリーダーシップ、教育現場でのコミュニケーションスキルや学業成績など、あらゆる場面に取り入れられている。これまで別々に捉えられていた問題が、情動性知能を適用することで、包括的に考えられる可能性が示され、ここに情動性知能の重要性があると考えられる。

今後の研究の展望

子どもの情動性知能とコーピングおよび問題行動

これまでに述べた情動性知能およびコーピングとの関連に関する研究は、ほとんどが成人を対象にしたものであり、子どもの情動性知能に関しては成人ほど進んでいない。しかし、子どもの情動性知能に関して検討することは、情動性知能の発達の側面を捉えるために重要であるばかりでなく、子どもの問題行動 (例えば、自殺、非行行動など) について検討する上でも非常に重要であると考えられる。

17歳から20歳の学生を対象に、情動性知能と非行行動の関係について調べた研究がある。Brackett, Mayer, & Warner (2004)は、情動性知能を客観的テストの

MSCEIT を用いて測定し、非行行動として飲酒、喫煙、不法薬物の使用、逸脱行動（けんかなど）について検討した。相関分析の結果、男子学生において、情動の知覚および促進の因子と不法薬物の使用（ -0.34 ）、飲酒（ -0.32 ）、逸脱行動（ -0.45 ）の間に有意な負の相関が見られた。同じく男子学生において、情動の理解および制御の因子と不法薬物の使用（ -0.23 ）、逸脱行動（ -0.21 ）の間に有意な負の相関が見られた。これらの結果から、情動性知能と非行行動の間には有意な相関関係があり、情動性知能が低いと非行行動を行う傾向があることが示された。

また、この他にも思春期の16歳から19歳の高校生を対象に、情動性知能とコーピング、および自傷行為の関連について検討した研究がある。Mikolajczak, Petrides, & Hurry (2009) は、情動性知能を TEIQue を用いて測定し、コーピングは適応的コーピングと非適応的コーピングについて検討した (Roger et al., 1993)。まず、情動性知能とコーピングの相関分析の結果、適応的コーピングとの間には正の相関（合理的コーピング： 0.46 、客観的コーピング： 0.37 ）が見られ、非適応的コーピングとの間には負の相関（情動的コーピング： -0.53 、回避コーピング： -0.26 ）が見られた。これは、成人を対象にした研究 (Petrides et al., 2007, Saklofske et al., 2007) と同様の結果が、思春期の子どもにおいても再現されることを示している。さらに、情動性知能と自傷行為の関係について、コーピングを媒介変数として検討したところ、情動性知能がコーピングを媒介して自傷行為に影響しており、特に、情動性知能の低さが情動的コーピング（=非適応的コーピング）の増加を招き、自傷行為を増加させていることが明らかとなった。

今後の展望

以上の研究から、子どもの情動性知能とコーピング、さらに問題行動との関係性が示唆された。今後の展開としては、まず成人だけでなく、子どもの情動性知能に関しても検討し、情動性知能の発達段階を明らかにすることが必要と考えられる。また同時に、情動性知能のみでなくコーピングとの関係についても検討し、特に子どもにおいては、問題行動への影響について明らかにしていく必要があると考えられる。そのために重要なことは、やはり情動性知能の測定法そのものを確立させ、情動性知能は能力なのか、また特性なのか、またはそれらが合わさったものなのかを検討することで、概念を明確にすることである。今後、情動性知能の基礎的な研究および応用的な研究が、ともに必要であると考えられる。

引用文献

- Bar-On, R. (1997). *Bar-On Emotional Quotient Inventory (EQ-i): Technical Manual*. Toronto: Multi-Health Systems.
- Bar-On, R. (2000). Emotional and social intelligence: Insights from the Emotional Quotient Inventory. In R. Bar-On & J.D.A. Parker (Eds.), *The handbook of emotional intelligence: Theory, development, assessment, and application at home, school, and in the workplace*. San Francisco: Jossey-Bass, pp.368-388.
- Bar-On, R., & Handley, R. (2003a). *The Bar-On EQ-360*. Toronto, Canada: Multi-Health Systems.
- Bar-On, R., & Handley, R. (2003b). *The Bar-On EQ-360: Technical manual*. Toronto, Canada: Multi-Health Systems.
- Bastian, V.A., Burns, N.R., & Nettelbeck, T. (2005). Emotional intelligence predicts lifeskills, but not as well as personality and cognitive abilities. *Personality and Individual Differences*, **39**, 1135-1145.
- Binet, A., & Simon, T. (1905). New methods for the diagnosis of intellectual level of subnormals. *Annals of Psychology*, **11**.
- Brackett, M. A., Mayer, J. D., & Warner, R. M. (2004). Emotional intelligence and its relation to everyday behavior. *Personality and Individual Differences*, **36**, 1387-1402.
- Campbell, A. & Ntobedzi, A. (2007). Emotional intelligence, coping and psychological distress: A partial least squares approach to developing a predictive model. *Journal of Applied psychology*, **3**, 39-54.
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multi-dimensional assessment of coping: A critical review. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 844-854.
- Goldenberg, I., Matheson, K., & Mantler, J. (2006). The assessment of emotional intelligence: a comparison of performance-based and self-report methodologies. *Journal of personality assessment*, **86**, 33-45.
- Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ*. New York: Bantam Books.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S., (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- Lopes, P. N., Salovey, P., & Straus, R. (2003). Emotional intelligence, personality, and the perceived quality of social relationships. *Personality and Individual Differences*, **35**, 641-658.
- Matthews, G., Zeidner, M., & Roberts, R.D. (2002). *Emotional intelligence: Science & Myth*. London,

- England: The MIT Press.
- Mayer, J.D., Caruso, D.R., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, *27*, 267-298.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D.J. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books, pp.3-31.
- Mayer, J.D., Salovey, P., & Caruso, D.R. (2002). *The Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test (MSCEIT): User's manual*. Toronto, Canada: Multi-Health Systems.
- Mikolajczak, M., Petrides, K.V., & Hurry, J. (2009). Adolescents choosing self-harm as an emotion regulation strategy: The protective role of trait emotional intelligence. *British Journal of Clinical Psychology*, *48*, 181-193.
- O'Connor Jr., R.M., & Little, I.S. (2003). Revisiting the predictive validity of emotional intelligence: Self-report versus ability-based measures. *Personality and Individual Differences*, *35*, 1893-1902.
- Petrides, K.V. (2001). *A psychometric investigation into the construct of emotional intelligence*. University College London: Doctoral dissertation.
- Petrides, K.V. & Furnham, A. (2000). On the dimensional structure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, *29*, 313-320.
- Petrides, K. V., Furnham, A., & Mavroveli, S. (2007). Trait emotional intelligence: Moving forward in the field of EI. In G. Matthews, M. Zeidner, & R.D. Roberts (Eds.), *The science of emotional intelligence: Known and unknown*. New York: Oxford University Press, pp.151-166.
- Petrides, K.V., Pita, R., & Kokkinaki, F. (2007). The location of trait emotional intelligence in personality factor space. *British Journal of Psychology*, *98*, 273-289.
- Roger, D., Jarvis, G., & Najarian, B. (1993). Detachment and coping: the construction and validation of a new scale for measuring coping strategies. *Personality and Individual Differences*, *15*, 619-626.
- Saklofske, D. H., Austin, E. J., Galloway, J., & Davidson, K. (2007). Individual difference correlates of health-related behaviours: Preliminary evidence for links between emotional intelligence and coping. *Personality and Individual Differences*, *42*, 491-502.
- Salovey, P., & Mayer, J.D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, *9*, 185-211.
- Salovey, P., Mayer, J.D., Goldman, S., Turvey, C., & Palfai, T. (1995). Emotional attention, clarity, and repair: Exploring emotional intelligence using the Trait Meta-Mood Scale. In J.W. Pennebaker (Ed.), *Emotion, disclosure, and Health*. Washington, DC: American Psychological Association, pp.125-154.
- Schutte, N.S., Malouff, J.M., Hall, L.E., Haggerty, D.J., Cooper, J.T., Golden, C.J., & Dornheim, L. (1998). Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, *25*, 167-177.
- Warwick, J., & Nettlebeck, T. (2004). Emotional intelligence is...? *Personality and Individual Differences*, *37*, 1091-1100.
- Wechsler, L. (1955). *Wechsler Adult Intelligence Scale*. Psychological Corp.
- Zeidner, M., Matthews, G., Roberts, R.D. (2009). Grace under pressure? Emotional intelligence, stress, and coping. In M. Zeidner, G. Matthews, & R.D. Roberts (Eds.), *What we know about emotional intelligence: How it affects learning, work, relationships, and our mental health*. London, England: The MIT Press, pp.203-222.
- Zins, J.E., Payton, J.W., Weissberg, R.P., & O'brien, M.U. (2007). Social and emotional learning for successful school performance, In G. Matthews, M. Zeidner, & R.D. Roberts (Eds.), *The science of emotional intelligence: Known and unknown*. New York: Oxford University Press, pp.376-395.